研究ノート

新発見の駅家遺跡・高田駅家推定地辻ヶ内遺跡の調査について

池田征弘

はじめに

平成一九年一〇月に開館した兵庫県立考古博物館では、その事業計画の一つの柱として、調査研究を通じて「地域文化の成り立ちを解明し、新たな地域像を創りだすため、総合的・学際的な体制による調査研究を推進し、その成果を発信・活用する」ことを掲げた。そうした目標に沿った研究課題として、兵庫県全域をエリアとし、県下市町との連携を図りながら進めることができる「兵庫県内における古代官道に関する調査研究」を研究テーマに選定した。

平成一九年度より開始した調査研究事業において、古代の駅家の所在地及び官道のルートを確定するため、主な取り組みとして第Ⅰ期（平成一九～二一年度）に加古川市古大内遺跡（賀古駅家推定地）、第Ⅱ期（平成二二～二四年度）に明石市長坂寺遺跡（仮称邑美駅家推定地）、第Ⅲ期（平成二五～二八年度）に姫路市向山遺跡（大市駅家推定地）の確認調査を実施し、各駅家遺跡の内容を明らかにしてきた。[1]

第Ⅳ期事業は、平成二九年度から六か年の計画で、上郡町教育委員会の協力をえて、高田駅家推定地の辻ヶ内遺跡（上郡町）の調査に取り組んでいる。

一　高田駅家推定地辻ヶ内遺跡の発見

調査研究事業を開始するにあたり、平成一九年

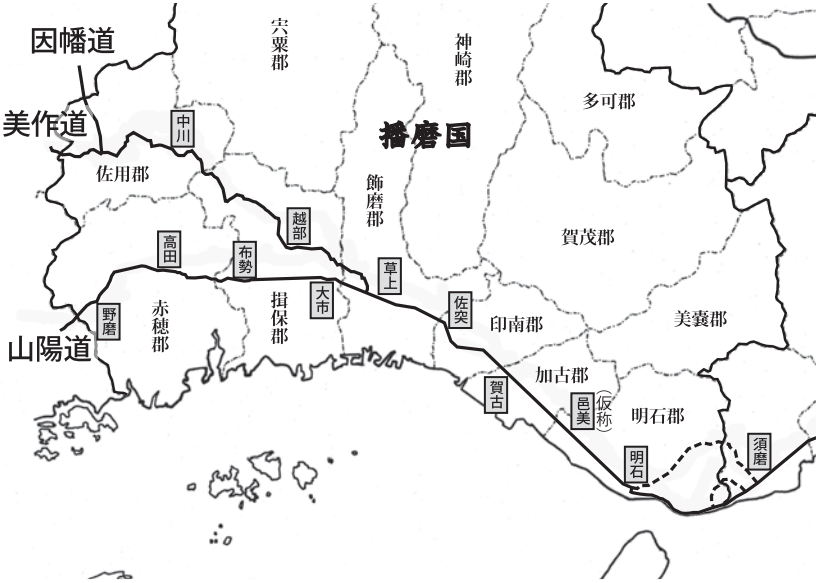

図１　播磨国の古代官道と駅家

度に県下の駅家及び官道推定地の分布調査を実施した。対象地の踏査とともに地元の教育委員会に従前の調査成果などの聞き取りを行った。[2]

野磨駅家と布勢駅家の間に所在する高田駅家の所在地については、赤穂郡高田郷の遺称地である上郡町東部の旧高田村内に位置し、瓦の採集されている神明寺遺跡（上郡町神明寺）がその候補地とされてきた。[3]

平成一九年度の分布調査において、上郡町下宿に所在する高田宿遺跡の東側隣接地において古代の瓦や須恵器が採集された。採集地は丘陵の西に近い圃場整備が行なわれた水田である。おおむね古代山陽道の路線を踏襲する県道姫路上郡線の北側に面し、東側の峠に向かう谷の出口付近に位置する立地が布勢駅家（小犬丸遺跡）や野磨駅家（落地遺跡）と共通することが注目された。また、同時に行われた神明寺遺跡の調査においては当地に所在する願榮寺の境内に塔心礎とみられる石材の存在が確認され、神明寺遺跡が寺院跡である可能性が高まった。圃場整備後の耕作地での遺物採集であることから、今後の調査が必要であるが、

立地からみて高田駅家の有力な推定地を発見することができた。この調査結果を受け、上郡町教育委員会により改めて周辺の踏査が行われ、小字地名から「辻ヶ内遺跡」と名付けられた。

二　条里と辻ヶ内遺跡

平成三〇年度は、現地での確認調査の実施に先立ち、辻ヶ内遺跡周辺の圃場整備以前の地形について検討をおこなった。当地は昭和四〇年代に圃場整備が行なわれたが、工事用の地形図は現存せず、空中写真（国土地理院昭和三九年撮影）により検討を行った。

上郡町東部の高田地域は、圃場整備以前に東へ8度振る条里地割が存在していたことが空中写真により確認することができ、古くからの水田地帯であったことがわかる（図2）。そして条里の痕跡を子細に検討すると県道姫路上郡線とその北側にかけて古代山陽道の痕跡と考えられる幅約一〇mの道代が存在することが指摘されている。[4]

辻ヶ内遺跡で遺物が採集されたのは、県道姫路

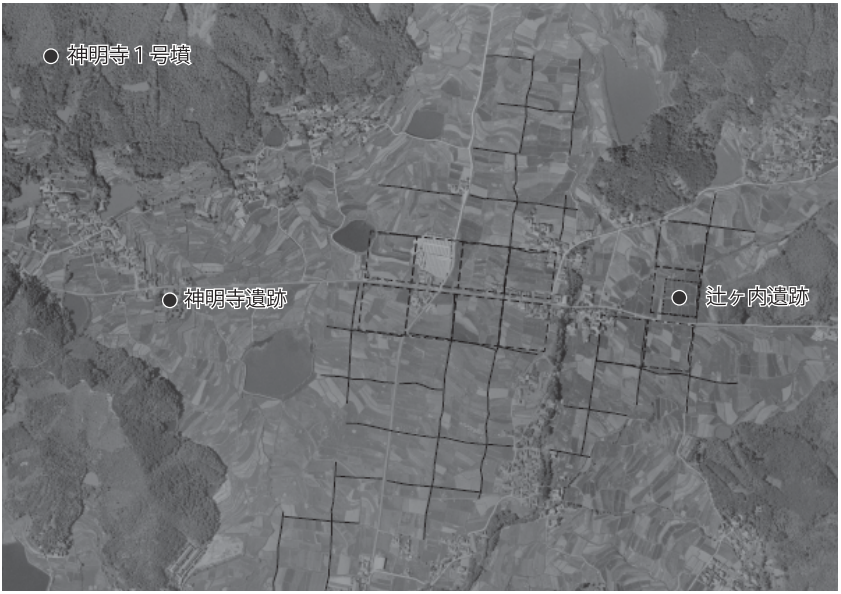

図２　条里と辻ヶ内遺跡

図３　辻ヶ内遺跡トレンチ配置図

上郡線と佐用谷集落へ進入する南北路の西北に接する三筆の水田である（図３）。この水田の圃場整備前の区画は、かなり細かく分筆されていた。そのなかで、県道の北約一七ｍの位置の東西方向の畦畔と南北路（条里ラインである）から西約八〇ｍの南北方向の畦畔は、直線的に整っているように見える。南北路と南北方向の畦畔の間隔の約八〇ｍは、布勢駅家推定地の小犬丸遺跡で検出された駅館院の一辺の長さと等しく、南北幅も北側に流れる佐用谷川までの範囲で八〇ｍの規模をちょうど納めることができる。このように、駅館院の外郭線が水田区画に残されている可能性が考えられるに至った。

また、県道北側の東西方向の畦畔は、古代山陽道の道代の北側のラインの延長上に位置している。ただし、このまま東へ延長すると丘陵に当たるため、実際の古代山陽道の路線は丘陵を避けて南側にやや振っていると考えられる。

三　辻ヶ内遺跡の確認調査

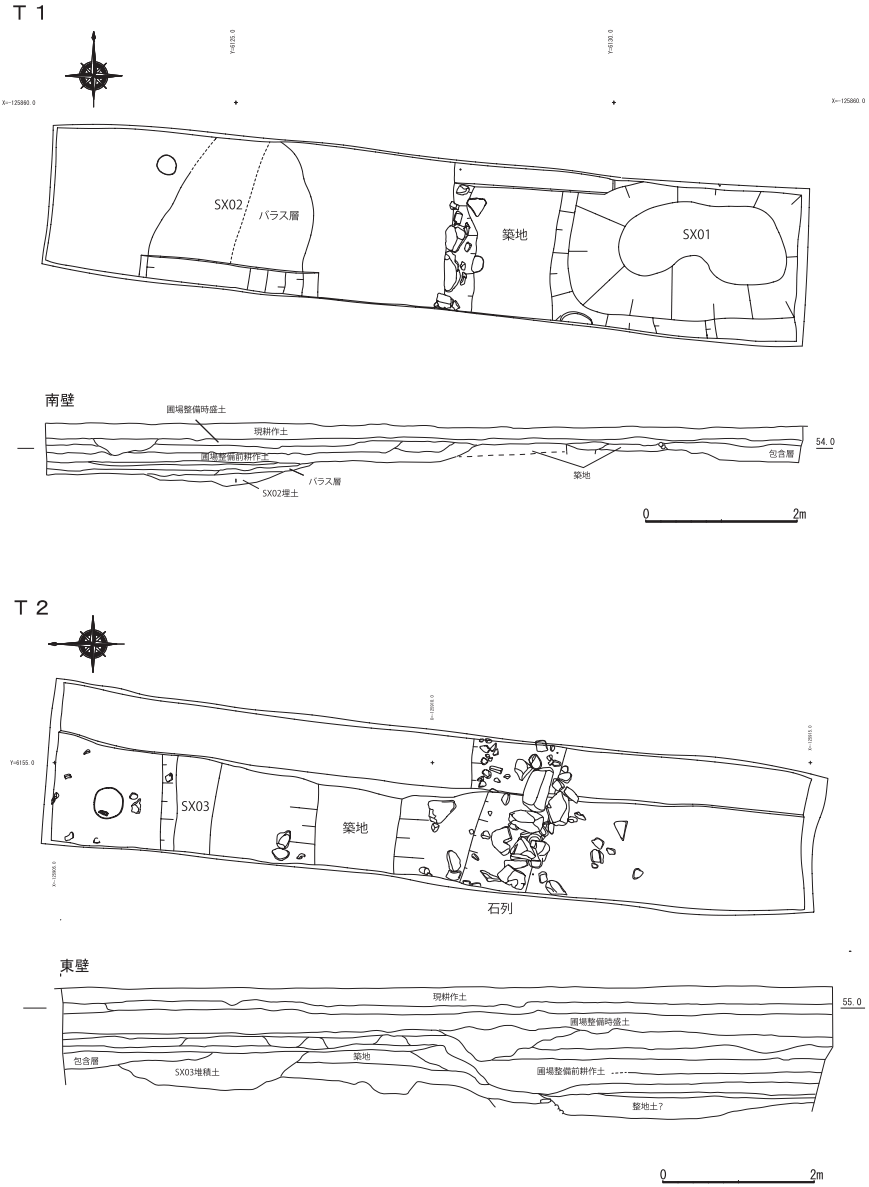

図４　辻ヶ内遺跡トレンチ平面図・断面図

令和元年度は、推定された駅館院の外郭線の西辺と南辺をまたぐように幅二m×長さ一〇mのトレンチをそれぞれ一箇所ずつ設定し、調査をおこなった。昭和四〇年代の圃場整備による遺構の削平はほとんどみられず、遺構の残存状況は良好であった。

T1

駅館院推定西辺外郭線に設けた調査区である。築地とその東西両側で落ち込みを検出した。築地は、圃場整備前の畦畔の位置で検出され、黄色シルト系の盛り上がり部分が築地の基盤層と考えられる。築地東側の落ち込み（SX〇一）は東西方向に長い土坑状で、埋土には瓦・須恵器・土師器を含み、ほとんど埋没した上面で瓦が大量に出土した。出土瓦には古大内式軒丸瓦、北宿式軒平瓦が含まれていた。築地西側の落ち込み（SX〇二）は南北方向の浅い溝状で、埋土上面にバラス層が認められた。排水溝が埋められ、犬走り状の整地面に改修された可能性がある。

T2

駅館院推定南辺外郭線に設けた調査区である。築地とその北側で瓦溜を検出した。築地は、圃場整備前の畦畔の位置で検出され、最下部が黄色シルト系の土、その上層が小礫混じりの暗灰色土で盛り上げられ、残存高は四〇cmであった。北側の瓦溜（SX〇三）は東西方向の浅い溝状で、遺構面直上で比較的良好な個体の瓦（鬼瓦を含む）や平安中期頃の須恵器碗が出土した。築地の南側は一m弱の段差をなし、築地基盤の盛土の裾を長六〇cm以下の石材で押さえる石列が検出された。

おわりに

調査の結果、昭和四〇年代の圃場整備の影響はほとんど受けず、遺構の残存状況は良好であった。築地とみられる遺構が検出され、想定どおり圃場整備以前のL字形に整った水田畦畔が、築地の痕跡を反映したものであることがほぼ確かめられた。出土した瓦の量は多く、軒瓦は駅家遺跡での出土例が多い播磨国府系である。このように辻ヶ内遺跡は瓦葺の駅家施設である高田駅家である可能性が極めて高いことが確認された。

今回の調査は小規模なものであったが、圃場整備前の地形を検討することで、効果的に成果を上げることができた。今後、駅館院北辺や内部の調査を進め、上郡町内に所在する国指定史跡山陽道野磨駅家跡に続く、駅家遺跡の保護・活用の端緒としたい。

註

（1）兵庫県立考古博物館『兵庫県古代官道関連遺跡調査告書Ⅰ』（兵庫県文化財調査報告三八四冊）二〇一〇年、兵庫県立考古博物館『兵庫県古代官道関連遺跡調査告書Ⅱ』（兵庫県文化財調査報告四五五冊）二〇一三年、兵庫県立考古博物館『兵庫県古代官道関連遺跡調査告書Ⅲ』（兵庫県文化財調査報告四九四冊）二〇一七年。

（2）兵庫県立考古博物館『兵庫県古代官道関連遺跡調査告書Ⅰ』（兵庫県文化財調査報告三八四冊）二〇一〇年、兵庫県立考古博物館『兵庫県古代官道関連遺跡調査告書Ⅳ』（兵庫県文化財調査報告五〇〇冊）二〇一八年。

（3）今里幾次「播磨国分寺式瓦の研究」（『播磨考古学研究』今里幾次論文集刊行会、一九八〇年）、高橋美久仁『古代交通の考古地理』大明堂、一九九五年。

（4）高橋美久仁『古代交通の考古地理』、吉本昌弘「山陽道―播磨国―」（『日本古代の交通・交流・情報』三、吉川弘文館、二〇一六年）。